

死と雪魔
大井川幸隆

(34)

人間が生きる爲の資財は疊々橋梁を破壊し、農作物
土地や自然を離れてあり得を蹂躪して七百萬圓の損害
ない。人間が生きることはも興へ、翌れば洪水の爲
大きな視野から言へば、自めに狼狽の色に疲れた人間
然と闘争し、自然を征服する
ことである。然し征服と鹿かに微笑んでゐるのだ
は云ふものの、これは自然の潔癖が葬式のことで何なの
の極少の一部、自然の一部の征服ではあるが、羽前羽後の農村には
自然の一切を征服すること
などは思ひもよらない。病院があるさうだ。これは大
自然は寧ろ自然の力、自然の潔癖が葬式のことである。
威厳に屈し、自然に屈服され
てゐる場合が多いのである。
「死なば四・八月」といふ
ことである。こんどの本縣に於けるはくは花の下にて我死なり
○正月や皇國に生れ難有し
○元旦や特に氣高し富士の山

大部前書きが諄くなつた
が、羽前羽後の農村には
立ちて眺め足下を
歎嘆の聲に歸りつゝ
其の頭上には皮肉な太陽が
清水遠く流れ行く
地上を通して崩え出る

、白面かく溶け行きて

、春さき淺き川岸に

立ちて眺め足下を

歎嘆の聲に歸りつゝ

其の頭上には皮肉な太陽が

清水遠く流れ行く

地上を通して崩え出る

事、いよいよ露顛と見透

しがついて見れば、とても

このまゝ後作の跡を追つて

江戸へ歸る氣になぞは

が、彼等の怨んでゐる

その一行の中であつた。

貧弱な地方紙乍ら

前線將兵に喜ばる

部隊長から本社へ謝状

本社は先生來〇支派遣河村（舊）部隊岡田部隊所屬將兵の陣中を慰む爲め本紙の郵送を續けてゐるが、妙なる地方の小紙乍ら周は案外の喜びを以て迎へられてゐるもののが如く此程岡田部隊長から次の一書状を寄せられた。

謹啓、寒氣日に加はり候處益々御潤榮之段奉賀候。

陳者貴社及各位に於かれにて家鄉の健兒を有する當隊の爲日々有益待報の新聞御送附に預、感佩至極に存上候。

御送附に預りし新聞は陣中に備へ將兵一層の慰安用として熟讀する外家鄉の近況各位の御援授を知り一同の精神修養と戰力の培養の資と成し居り候。且

新聞御送附に預、感佩至極に存上候。

二仲。本手紙着の頃は聖戰第三年の新春を迎へる

昭和十三年十二月三十日

岡田部隊長

磐城新聞社殿

二仲。本手紙着の頃は聖戰第三年の新春を迎へる

昭和十三年十二月三十日

岡田部隊長